

平成 30 年 5 月 21 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01955

研究課題名(和文)高野山の外国人観光客に見る観光体験の総合的研究

研究課題名(英文)A Study on the Various Experiences of Inbound Tourists in KOYASAN

研究代表者

上村 隆広 (Uemura, Takahiro)

大阪府立大学・経済学研究科・教授

研究者番号：70244621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、開創1200年を迎えた高野山を訪れる外国人来訪者の観光動機・体験を実地調査し、高野山における外国人特有の観光体験の実態について、「観光と物語」「多感覚体験」「場所の聖性」等の視角から解明することを目的としたものである。

各種調査の結果、以下のような知見を得た。即ち高野山の自然的環境、宗教的伝統、今日の実践が融合して得られる独特の観光体験が、精神性に価値を置く来訪者の高い満足度と評価につながっている一方で、インバウンド急増による「観光地化」的变化等の懸念も出始めており、高野山が観光体験の質を持続させるためには、内外の旅行者とホスト側との「対話」的關係性の増進が期待される。

研究成果の概要(英文)：This study aims to investigate the motives and experiences of inbound tourists visiting Koyasan-temple (Wakayama, Japan). According to our questionnaire survey, tourists' motivations to visit Koyasan are (1) lodging experience in Koyasan, (2) Buddhist experiences, (3) spiritual experiences (e.g. meditation). Questionnaire survey revealed that foreign tourists are interested in Japanese cultural items, Buddhist ceremonies and Shojin cuisine. In addition, we compared the experiences of lodging in Koyasan and other religious places abroad (in Europe and Korea). While the power of religion is said to be declining, the significance of experiencing traditional life and religious experiences of different cultures is becoming more meaningful.

As for the structure of narrative, we found the existence of lots of discourses which strengthen the master narrative of Koyasan and the diversity of meaning-making of Koyasan experience by tourists.

研究分野：社会学、観光学

キーワード：高野山 聖地 宿坊 インバウンド 観光体験 精進料理 外国人来訪者

1. 研究開始当初の背景

2012年以降本格化したインバウンドの増加に関心を持つ研究者から成る本研究ユニットのテーマ設定に際して、間近に迫っていた2015年の高野山の開創1200年は大きな契機となった。関西は言うに及ばず、日本を代表する仏教聖地の一つである高野山があらためて内外から大きく脚光を浴びる機会がめぐってきたとの認識の下に、日本人来訪者・参拝者の漸減傾向とは対照的に徐々に存在感を増しつつある外国人(とりわけ欧米系)の来訪者にとって、現在の高野山はどのような体験と印象をもたらしているのか、またインバウンドの増大が高野山にどのようなインパクトを与えつつあるのかを明らかにするべきであるという点でメンバーの一致を見た。

その際、スピリチュアル・ツーリズムやヘリテージ・ツーリズム研究の領域において論究されてきた「観光体験」を基軸概念に据え、これに内包される諸現象を多面的に解明することが今後のインバウンド研究を進展させる上でも有益であるとの見通しの下に研究を開始した。

2. 研究の目的

近年高野山来訪者のなかで顕著な増加を見せている海外、とりわけ欧米諸国からの旅行者が、どのような動機・期待を抱いて高野山を目指し、山上においていかなる観光体験・聖地体験を得、訪問後にどのような観光ナラティブを通じて自他に向けて高野山での観光体験を語るのか、その一連の過程を、観光と物語、多感覚体験、場所の聖性と空間体験、観光体験のゼマンティックといった諸観点から総合的に把握することを目指し、そのことを通じて観光学・観光研究における観光体験の理論的及び実証的研究の深化を図らんとした。高野山観光における物語やナラティブという観点からは、「物語の存在構造」及び「物語行為の存在様態」を把握することを目指した。具体的に前者に関しては、メディア空間上や現地での物語のあり方を、後者に関しては、現地において観光者が生きる意味体験のあり方や、観光者のアイデンティティ変容のあり方について把握することを目指した。

3. 研究の方法

(1)研究開始当初は、高野山の宗教都市形成の歴史、地理的環境、産業、観光に関わる各種団体や宿坊の実状、情報発信の実態等について、文献収集とその分析(書籍・ガイドブックやインターネットサイトにおける、高野山観光を巡るマスター・ナラティブのあり方の収集等)と並行して、主に高野山の行政関係者や宿坊運営者への予備的ヒアリングを数次にわたって実施することで、インバウンドを引きつけるに至った背景要因についての認識を深めた。

(2)上記の準備作業を踏まえて、外国人来訪者の観光体験の実相に迫るべく、協力の得られた高野山宿坊に実際に宿泊した人々に対して、留め置き方式による調査票調査(英文。旅程に関して3項目、高野山での体験に関して9項目、属性および自由

記述)を実施した。回収できた220人からの回答について簡易の集計を施し、高野山での聖地体験(場所性)、宿坊・寺院での宗教体験(勤行・阿字観等)、宿泊体験(精進料理等)のそれぞれについて分析と考察を行った。併せて、外国人旅行者にガイドツアーを提供している団体代表などのホスト側の主要アクターへのインタビュー(およびツアーへの同行)と、実数はわずかではあるが宿坊宿泊者への補足的聞き取りも実施した。また、関連調査として、高野山以外のスピリチュアル・ツーリズムの舞台となっている国内外のデスティネーションについての現地調査も実施し、高野山との比較考察を行った。

(3)最後に、種々の方法を駆使して得られた情報及びデータを広く共有し、多角的認識を深める趣旨から、高野山の宿坊運営者、和歌山県の経済シンクタンク研究員、そして高野町でインバウンド促進活動を行うNPO法人関係者などをパネラーとする公開シンポジウムを企画し、研究成果の批判的吟味を試みた。

4. 研究成果

(1)既存の高野山観光研究のレビュー、本研究におけるアンケート調査、そして高野山宿坊の担当者や外国人向け高野山ガイドツアー主催者らへのインタビュー等から、外国人来訪者の高野山の「場所性」の認識および意味づけについて、外国人来訪者がホストである高野山(金剛峯寺、各宿坊)関係者やガイドツアーらの提示する高野山の歴史性や宗教性に関する解説や解釈およびそれらに関連するホスピタリティを受けとめつつも、独自の「場所体験」を通じて特有の「場所性」のゼマンティック(意味論)を生成し、同行者たちとの対面的コミュニケーションやSNSを介した発信によってそれを強化しているであろうことが推察できた。

(2)観光体験と物語との関わり、観光者の主体性の変容という観点からは次のような認識を獲得した。一つは、高野山を訪れる外国人観光客は、基本的にはメディア上で流通しているマスター・ナラティブに沿う形で自身の経験を形成し了解している傾向が強いが、特に高野山の「自然」に対する満足度が高い点は、今後の観光体験の開発・整備に関しても示唆に富む結果であると言える。また、帰国後に「瞑想」を日常生活に取り入れている外国人観光客も複数存在することから、瞑想体験の真正性の担保が重要である点も確認された。

(3)インバウンド・デスティネーションとしての高野山の今後を考える上で参照すべき国内外のスピリチュアル・ツーリズムとの関連では以下の諸点が重要である。

高野山の宿坊体験の外国人観光客がこの10年余順調に増加し今後もさらなる増加が予測される中、その一方で国内からの参拝者が減少し続けている状況に対し、何らかの施策が求められている。そのため国内における他の場所での宿坊体験

の可能性を探ったが、全国に散在する地方の一般寺院において参禅客や研修団体の受け入れを行っている寺院においては、今後の対応の可能性が見いだされた。さらに韓国のテンプルステイ(宿坊滞在に相当)への調査では、高野山と宿坊の歴史、体験プログラムの内容、施設、環境、サービス内容、場所性などの違いはあるものの、観光客の動機はスピリチュアリティを通じた仏教文化体験ということにおいて共通したものがあり、特に高野山の国内来訪者・参拝者の減少を食い止めるには韓国のテンプルステイに見習うべきものが多いことが分かった。スピリチュアル・ツーリズムの体験プログラムの開発の点からも伝統に基づいた創造と革新が必要なることが明らかとなった。

宗教が衰退する中、「宗教制度の弱体化による宗教の個人化」が指摘されているが、高野山と韓国寺院では不変の宗教的営みが連綿と続いている。そうした場所に、現代人がスピリチュアリティを求めて来訪し、異文化の伝統的生活と宗教的体験をすることの意義は大きい。日本人の高野山参拝客が減少している現実、僧侶との対話の不足や、それを実現できる修行体験プログラムの不足を示している。韓国のテンプルステイプログラムではそうした需要への対応がほぼ完璧にできている。スピリチュアル観光客に望まれる体験プログラムの創造がツアーオペレーターや観光関係者には求められている。

ヨーロッパの宗教空間あるいは精神的コミュニティのための空間(ポルトガル・ファティマ、スイス・ドルナッハ、スペイン・モンセラット)との比較については、宗教空間以外は特に消費する施設などの観光資源としての要素がなく、他の土地からも隔離されているという点で高野山と共通するものの、その一方で高野山来訪者が仏教信者ではない多数の人々によって占められているのに対して、ヨーロッパの場合はカトリック教会であれ(ファティマ、モンセラット)、人智学であれ(ドルナッハ)であれ、信徒・教会員が大半を占めており、式祭典の宗教性それ自体のもつ求心力や、教会員のコミュニティ性の高さによって支えられる聖地と、自然環境と地理的特質および歴史性が宗教性を補完する高野山との差異が鮮明になった。

(4)以上の諸点から、現時点では、高野山の地理的・自然的環境と宗教的伝統および今日の実践とが融合することによって得られる独特の観光体験が形成されており、それが高度な文化資本を有する欧米系の知的来訪者の高い満足度と評価につながっていることが明らかとなったが、その一方で、近時の急速なインバウンドの増加によって、「観光地化」さらにはオーバーツーリズムの懸念も皆無とは言えず、聖地高野山がその場所性を活性化し来訪者の観光体験の質を持続させるためにも、ホストとしての高野山関係者と精神性を求めて訪れる内外の旅行者との「対話」的関係性の増進が必要であるとの認識が得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

尾家建生、「ニューツーリズムの観光動機 高野山の外国人観光客研究へのアプローチとして」、第30回日本観光研究学会全国大会学術論文集、査読無、第30巻、2015、pp.285-288

原一樹、「高野山を訪れる外国人観光客の『物語』経験 問題設定と中間報告」、第30回日本観光研究学会全国大会学術論文集、査読無、第30巻、2015、pp.93-96

尾家建生、「スピリチュアル・ツーリズムの動機と体験 高野山宿坊にみる外国人観光客」、第31回日本観光研究学会全国大会学術論文集、査読無、第31巻、2016、pp.5-8

尾家建生、「スピリチュアル・ツーリズムの場所性と観光体験」、第32回日本観光研究学会全国大会学術論文集、第32巻、2017、pp.197-200

[学会発表](計6件)

尾家建生、「ニューツーリズムの観光動機 高野山の外国人観光客研究へのアプローチとして」、第30回日本観光研究学会全国大会、2015年11月29日、高崎経済大学

原一樹、「高野山を訪れる外国人観光客の『物語』経験 問題設定と中間報告」、第30回日本観光研究学会全国大会、2015年11月29日、高崎経済大学

花村周寛、「高野山をケーススタディとした聖地のデザイン特性に関する研究」、第30回日本観光研究学会全国大会、2015年11月29日、高崎経済大学

尾家建生、「スピリチュアル・ツーリズムの動機と体験 高野山宿坊にみる外国人観光客」、第31回日本観光研究学会全国大会、2016年12月4日、江戸川大学

花村周寛、「サンティアゴ・コンポステーラと巡礼路における聖性のブランディングの歴史的変遷に関する研究 聖なるまなざしの演出の観点から」、第31回日本観光研究学会全国大会、2016年12月4日、江戸川大学

尾家建生、「スピリチュアル・ツーリズムの場所性と観光体験」、第32回日本観光研究学会全国大会、2017年12月3日、金沢星稜大学

[図書](計0件)

[その他]
特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

上村 隆広 (UEMURA, Takahiro)
大阪府立大学大学院 経済学研究科・教授
研究者番号：70244621

(2)研究分担者

花村 周寛 (HANAMURA, Chikahiro)
大阪府立大学大学院 経済学研究科・准教授
研究者番号：00420430

(3)研究分担者

尾家 建生 (OIE, Tateo)
大阪府立大学 研究推進機構・客員研究員
研究者番号：30441124

(4)研究分担者

原 一樹 (HARA, Kazuki)
京都外国語大学 国際貢献学部・教授
研究者番号：90454785